

書評

横内憲久・横内研究室著 『ウォーターフロント開発の手法』

安彦正一

(東京交通短期大学)

1. はじめに

近年各地においてウォーターフロント開発の議論がジャーナリズムをにぎわしている。改めるまでもなく、今日の国際化、情報化社会の紹来は都市機能を大きく変化させ、都市生活者のライフスタイルを変えた。それは余暇時間の増大をもたらし、都市化現象の変化はことさらアメニティの希求にあると思われる。こうした状況をふまえて、単行本として上梓された文献「ウォーターフロント開発の手法」は、今日的ニーズに応えたものとして意義深いものがある。

さて、本書は日本大学理工学部の横内助教授と研究室のスタッフでまとめたものである。著者の紹介は『港湾経済研究25号』の富田功氏のそれにゆずり、著者がウォーターフロントを研究するに至った動機について触れると、ウォーターフロント研究を手始めた、昭和40年代後半は、大都市中心部の夜間人口が減少するという都心空洞化現象が顕著になっていた頃で、筆者も都市居住の可能性を模索しているうち「空間をサーベイしているうちウォーターフロントが視野に広がり」(p.202)それが研究の発端になったとされるから、この方面的数少い研究者の先達の一人であったといえる。

さて、本書は著者がいう「ウォーターフロントを単にブームとして終らせるのではなく、都市のコンテクストの中で捉え、個性ある都市形成となるべく位置づけをはかる」という問題意識から論じたものである。

本書は明快な論述で書かれ、一読すると多くのウォーターフロント研究の材料を提供してくれる。その意味で本書の刊行は真に意義あることといえよう。

以下、紙数の制約で充分な内容を紹介できぬが、本書の目次の順に述べていこう。

2. 本書の構成と概要

本書の構成は大きく6部で構成し、各部はさらに小項目で分類し、ウォーターフロントの体系を理解できるように構成されている。次にその目次を紹介すれば以下のようにある。

序

1. ウォーターフロントの意味
2. ウォーターフロントの特性
3. ウォーターフロント開発の動向
4. ウォーターフロントからの街づくり
5. ウォーターフロント開発のキーワード
6. ウォーターフロント開発の展望

あとがき

著者はまず、ウォーターフロント（以下WFと略す）が台頭してきた背景を論及する。すなわち、都市化・国際化・情報化の従進、産業構造の変化、アメニティの希求、ライフスタイルの変化、余暇の過ごし方の変容、などの諸要素がWFに望みをかけているというその場合、WFの有している都市での役割をどのように位置づけるかについて、①都市にとっての役割、②機能としての役割の二点から論及する。①では、水と人々との接点としての「点的役割」、河川か水路のような連続空間としての「線的役割」、水面と都市生活に活かす「面的役割」（p.22～25）について展開し、②では、空間的確立機能、結合機能、拠点機能社会活状機能について論及し、WFの役割を捉えることを強調するそしてWFと都市との関係について分析する。こうした機能を有するWFであるからこそ、むやみに利用開発を行うのではなく、その資質を見極めて計画を策定すべきであるとされる。

第2部では、WFの特性について分析するこの場合、著者が指摘するのは、WFの空間からもたらせられる物理的要素「方向性」「完結性」「生産性」「多様性」「レジャー性」と、WFの空間を介することによって得られる精神的要素、「解放・開放性」「非日常性」「アメニティ性」「文化、歴史性」「アピール性」とされる。「これらを利用計画の中で生かすことができれば、WF開発は実現化への一步前進となる」

(p.44) とする。

第3部では、特に北米のWF開発を取り上げ、開発のパターン、社会的意義などを詳述する。すなわち、WF開発は、目的、方法によっていくつかの類型があるとする。
①はアメニティに注目した「アメニティ活用型開発」、②部分問題の解決の場とする「都市問題解決型開発」、③荒廃したWFに再生する「荒廃地再生型開発」、④都市基盤と施設の整備を重点とした「基盤整備型開発」、⑤市場性に着目し、商業、文化機能を誘致する「市場性着目型開発」と名づけ、それらの内容に詳述している。

第4部では、わずか4項足らずであるが、WFを単なる、水辺の有効利用するにとどまらず「地域を含めて、都市と一緒に機能することによって、魅力のある都市の核づくり街づくりの担い手」(p.64)となるとする。その点から、どのような街づくりにWFは貢献しているか、について論及する。そのコンセプトとしての潤いのある街、②計画的な街、③安全な街、④わかりやすい街、⑤変化のある街、⑥便利な街、⑦活力のある街、⑧楽しい街、⑨快適な街、⑩文化のある街、⑪連帯感のある街、⑫ドラマチックの街などはWFでは実現できるとする。本書はそれらの街を多くの画像を取り入れることによって説得力をもたせており、我が国のWFによる街づくりに大いに参考になるものと思われる。

第5部は、本書でもっとも多くの頁数を費し、本書の問題関心の中心をなすところと思われる。そこで、著者はWF開発は一般的に多くの要請の高まりの中で、「事例の多くは欧米のプロジェクトの例が紹介されてきた」、しかし「それらの事例を単に、楽しくユニークな開発であるといった表層面を眺めていたのではその本質を読みとることはできない」(p.74)また「羨望の対象として完成されたプロジェクトを全体像としてみたのでは、我が国の可能性に疑問を抱きかねない」(p.74)と指摘する。いずれにせよ、ここでは北米の先進事例と我が国内外のWF開発例を整理し、計画手法のキーワードを抽出することによって、それを分折していくのである。その場合、著者の分析手法は44のキーワードを抽出し「成功の裏に隠されている様々なデザイン要素を、演出の仕掛け」(p.74)を明らかにしていくとする問題関心である。それには①景観の演出、②護岸のデザイン、③広場のデザイン、④遊歩道のデザイン、⑤水辺の演出、⑥建物の配置とデザイン、⑦ソフトの演出などの概念を紹介する。①の演出のキーワードには、材料と色彩の調和、スカイラインの統一、スリットの確保(建

物と建物の間に設けられる隙間), 見通しの確保, 眺望の確保, 植栽の促進, ランドマークの形成(地域の目印)などを紹介し, それらの印象のいかんによって, WFの評価が左右されると指摘されている。

②について著者はいう「WFが認識されなかった時代は護岸は人間の財産を守ることを考え, 頑強に造られていればよかった」と, しかし「近年は認識が変わり, 親水性という考え方方が重視され, 護岸の設計も, 治水面だけでなくアメニティを考慮したデザインを施すことが必要である」(p.91)といい, そのためには「護岸のデザインを, それぞれ水域に備わった制約条件の中で, いかに親水性を高め人々が馴染みやすいWFの環境を創出できるか」(同頁)とし, 石積み直立護岸, 石積み傾斜護岸, 碎石盛り護岸, 階段護岸, 水と面一, 人工砂浜の6つのキーワードを紹介する。

③では広場は, WFを公共的空間とするもっとも有効な施設であるとし, それらの広場を演出するキーワードを, 水辺の広場, ピアの広場, ジャブジャブ広場, 噴水, スタンド展望台について紹介する。

④では遊歩道が都市にとって重要な役割を担うだけでなく, WF開発においては, アメニティを満喫しながら楽しく歩ける水辺の空間を形成できること, 市街地とWFを連続的に結び, 来訪者を水辺まで無理なく誘い込むことのできるアクセス路を整備することであると, 二点に整理される。こうした遊歩道の演出デザインを, ペーブメント(石やレンガなど様々な舗装材によって整備された路面のこと), ボードウォーク, 縁石, 棚, 支柱, ベンチ, 旗, 屋外照明など8つのキーワードについて紹介する。

⑤では, 水辺を演出する効果について説明される。それは船舶の装置が有効的であるとし, その上で, 釣り桟橋と橋についての演出について紹介している。

⑥では, WF開発計画の立案において検討を要するのは対象となる地域の歴史的背景の把握が必要であるとし, 残存する歴史的建物の有無と, 再利用の可能性を検討する。その場合8つのキーワードの例を紹介する。即ち歴史的遺産の活用, テラスとバルコニー, 張り出しデッキ, 庇と日除け, サインとマーク, 屋外レストラン, 浸水防止対策, 季節風への対応策などである。以上の紹介はWF開発に際してのデザイン手法をキーワードによって整理した例であるが, 著者はそれだけでは「WFの成功はありえない」(p.100)とし, 以上の整備に加えて, いかに都市生活者を吸引させるのか, ソフト面での企画, 準備が必要であることを強調する。その点から, ⑦では, イベン

ト、祭り、水質維持のキーワードについて紹介する。

最後に第6部は、ウォーターフロント開発の都市における役割あるいは展望について論じるとともに、日本型WFの可能性について論じている。著者は、今後さらに発展を遂げんだろうと述べつつも、欧米と我が国の事例を比較し、欧米の成功の事例を盛りこみながら、あくまでも、我が国なりの日本型WFの確立を強調する一方、展望を試みている。

3. 本書の意義とまとめ

以上の内容の本書は、WFという脚光を浴びている問題を都市との関連づけの中で、可能な限り実証的データで考証したものである。従って、本書では多くのWFに関する文献はもとより、写真を駆使するなど、わたしたち素人にも、理解できるようまことに明快な分析をもって示してくれた。併せて、今後ウォーターフロントの開発が注がれているなかで市民の親水空間の場として港湾の役割はますます重要となるものと考えられる。しかし、著者が述べるようにウォーターフロントの開発を「都市的、長期的視座に据え、かけがいのない資源利用といった目的で、計画、検討し、経済性のみに偏った短絡的な開発に陥らない理念や理性をもつべきである」(p.8)との指摘は、今後のWF開発を考える上で極めて重要な示唆を与えていたといえよう。

いずれにしても、今後ウォーターフロントの整備、海洋レクリエーション施設の整備計画など整備機運の高まりのなかでこの方面的研究を志す者にとって、この労作は貴重な文献となるに違いない。もとより、最近のウォーターフロント研究分野の好著と評しうるものであることはいうまでもない。是非本書の一読をすすめるとともに著者の今後の活躍を期待したい。

(昭和63年5月 鹿島出版会刊 3,400円)